アクティブ・ラーニング型授業における学修支援を通したアドバイザー学生の学び

大学教育学会第３８回大会自由研究発表　部会５　学生支援・ピア・サポート（１）
２０１６年６月１２日　於：立命館大学大阪いばらきキャンパス

河内　真美（金沢大学）
杉森　公一（金沢大学）
上畠　洋佑（金沢大学）

本発表の目的

◆目的

アクティブ・ラーニング型授業において学修支援に携わった学生が、
活動経験を通してどのような学びをしたのかを明らかにする

事例：金沢大学のアクティブ・ラーニング・アドバイザー（ALA）制度

※「学修支援」：授業に係る学修に対する支援

◆課題

① 【制度】ALA制度の概要と特徴

② 【実践】ALAによる学修支援活動の実施状況

③ 【学習】学修支援活動を通したALAの学び、ALAにとっての効果

本発表の背景

◆実践

・「廣中レポート」を契機とした学生による教育・学修支援の推進と拡がり

「学生に対する教育・指導に学生自身を活用することは、教育活動の活発化や充実に資するのみならず、教える側の学生が主体的に学ぶ姿勢や責任感を身に付けることができることにもなり、非常に意義深いものである。〔中略〕。これからは、学生の希望に応じ、大学院学生だけでなく学部の上級生についても、このような機会を積極的に与えていくことが望まれる。」（文部省高等教育局 2000）

・TA・SAの制度を設けている大学　61.3%（日本学生支援機構 2014）

◆先行研究

・教育・学修支援にあたる学生の学びや成長に関する研究

ー支援における実践的思考の解明（岩﨑 2014）

ーモデルの適用による成長プロセスの分析（西村ほか 2011）

ーSAの限定的活用（「雑用」）、SAの学びや成長は副次的産物との位置づけ

⇔ 双方向化が進んでいる授業ではSA自身の学びや成長により注力しても（立山 2013）

アクティブ・ラーニング・アドバイザー制度

◆制度設立

・2015年度前期より独自の制度として試行的に導入（後期より本格実施）
・大学教育再生加速プログラムの取り組みとして構想
・人間社会学域と理工学域で先行実施、全学（学士課程）に拡張

◆目的・趣旨

・授業時間内外において学修支援を行うことで受講生の学修の充実を図る
・特に講義・演習科目のアクティブ・ラーニング型授業への移行促進
　＆　授業時間外学修の充実
→ 講義、演習（卒業論文・卒業研究指導、ゼミ以外）科目へ
→ 2016年度～　実験・実技・実習（教員の補助のみでは対象外）科目も

アクティブ・ラーニング・アドバイザー制度

◆ALA

・学士課程２年生以上、大学院生・・・「身近な上級生」

・活動内容＝授業に係るアクティブ・ラーニングに対する支援

・１科目における人数や活動回数は柔軟に設定可

◆選考

・授業担当教員による申請書類に基づき科目を選考
学修活動と教育上の効果、ALAの必要性、学修支援スケジュールなど

・ALAは授業担当教員が推薦（2016年度後期より公募制も導入予定）

◆研修・報告

・事前研修（学期始め頃）：研修会への参加

・事後報告（学期終了後）：活動報告書の作成＋報告会への参加

ALAによる学修支援活動の実施状況

◆ALA採用科目数とALA数

	対象部局	採用科目数	ALA学生数
2015年度前期	人間社会学域、理工学域	11	24
後期	人間社会学域、理工学域、医薬保健学域	19	72
2016年度前期	全学（共通教育含む）	30	112

◆学修支援活動の内容例

	ALAによる学修支援活動例
授業時間内	・議論のファシリテーション（環境づくり、議論の進め方への助言、停滞時の声がけなど） ・グループワーク（発表、PBLなど）の内容や作成資料に対する助言、フィードバック
	・演習問題に取り組む際の支援（考え方に関する助言、参照箇所の提示、進捗状況確認、解説） ・授業内容や課題に対する質問への対応
授業時間外	・発表準備（資料検索や調査の方法、発表資料など）に関する助言、フィードバック ・レポート・論文の作成に関する助言、フィードバック
	・理解度確認のための小テストや演習問題の実施、解説、フィードバック ・授業内容や課題に対する質問への対応

ALAの研修と報告

◆ALA研修会

- 目的：心構えと基礎的スキルの獲得
- 内容：AL・ALAとは、学修支援の
  心構えとスキル、困ったときは、
  経験者との交流
- 90分＋30分（報告会）
- ワークショップ形式
  ペアワークやロールプレイ

◆活動報告書とALA報告会

- 目的：振り返りと学生間での経験伝承
- ＜報告書＞活動内容と自己評価
  ー５件法（９項目）
  ー自由記述（活動と効果、問題点）
- ＜報告会＞30分
  報告書に基づく報告と質疑応答

ALA制度の特徴

◆制度面での特徴　　柔軟性

・対象：採用される科目の幅広さ。多くは専門教育科目での活動。

→ ALA採用科目としての適切性に関して選考

・支援学生：学士課程学生も大学院生も可能

・活動内容：多種多様なものが可能

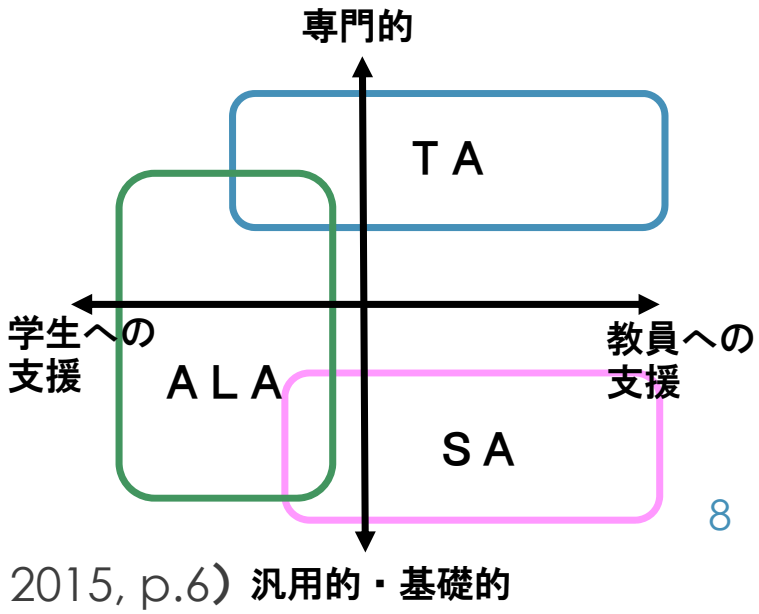
・活動頻度：授業設計に合わせて柔軟に設定可能

◆ALAの役割　　ピア性

・教員の補助ではなく学生への学修支援の重視

・ピア・サポートの構造

「同じ学生同士が専門性を持つ教職員の指導のもと、
仲間同士で援助し、学び合う制度（プログラム）」（沖 2015, p.6）



学修支援活動を通してALAは何を学んだのか？

- 目的：活動を通してどのようなことを学んだとALA自身が考えているのかを明らかにすること（**自己評価**）
- 方法：活動報告書の分析

① ５件法で回答する９項目についての単純集計、相関分析　**【量的分析】**

② 自由記述の分析（KJ法）　**【質的分析】**

１）学んだことに関わる記述から「一行見出し」を作成
２）共同発表者３名でグループ編成、グループ間の関連づけの検討

- 対象：2015年度後期に活動したALAのうち57名分

ー全72名のうち、未回収6名、使用不可9名（5月末時点）
ー所属課程：学士課程学生45名、大学院生12名
ー授業開設部局：人間社会学域9名、理工学域22名、医薬保健学域26名

ALAの学び（量的分析１）

	設問	回答（人数）					無回答	平均
		1	2	3	4	5		
1	ALAとして活動することは面白かった	1	0	12	36	8		3.87
2	ALA活動は自分にとって意義があった	0	0	5	43	9		4.07
3	受講生の立場に立って、助言や支援ができた	0	5	12	35	5		3.70
4	受講生と良い関係を築けるような言動ができた	0	1	18	31	6	1	3.75
5	ALAとして担当教員から期待されていた活動ができた	0	1	29	25	2		3.49
6	授業内容についての受講生の理解を深めることができた	0	3	24	26	4		3.54
7	授業に対する受講生の意欲を引き出すことができた	0	2	32	20	3		3.42
8	ALA活動をするうえでALA研修会は役に立った	0	10	20	23	4		3.37
9	今後も機会があればALA活動を行ってみたい	3	3	1	2	5		3.53

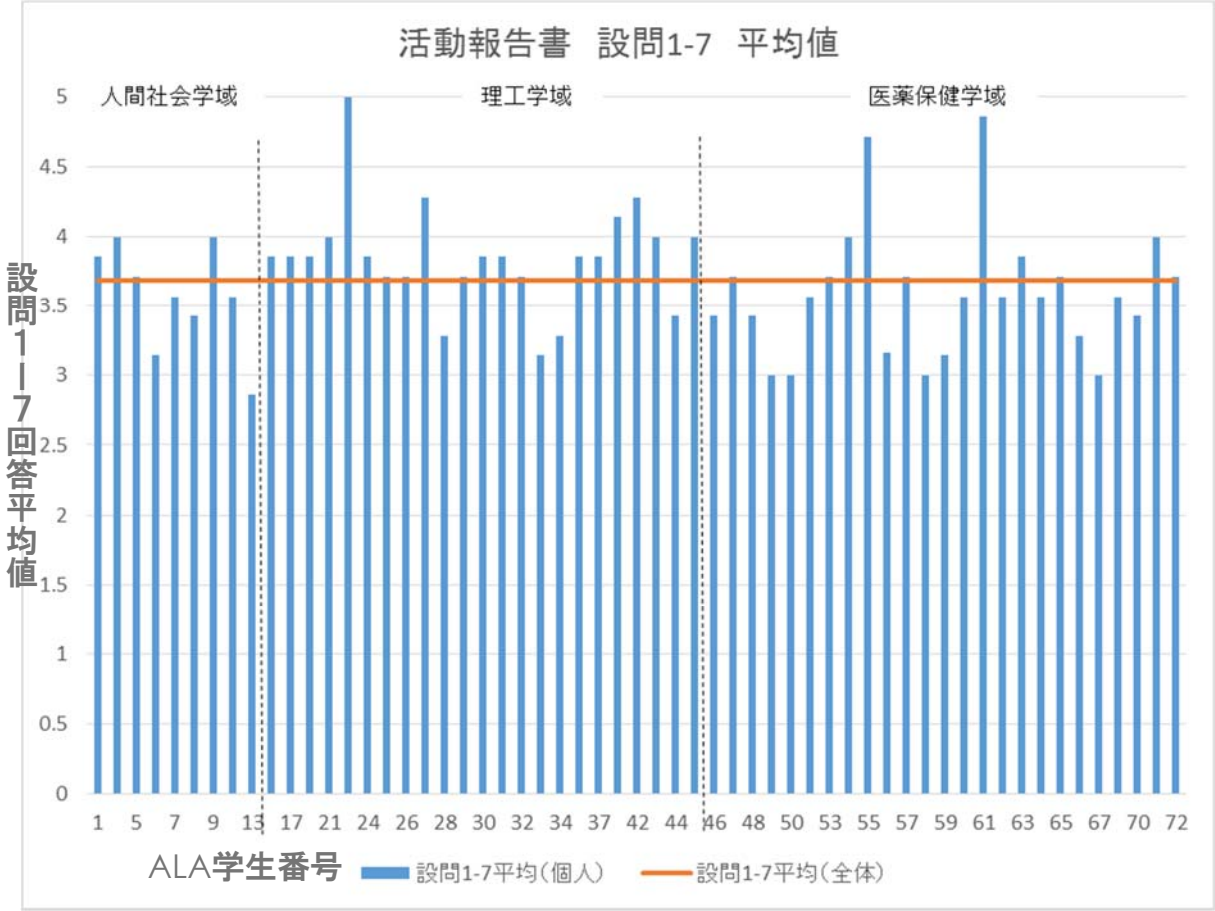
回答（５件法）
- １：全くあてはまらない
- ２：あてはまらない
- ３：どちらでもない
- ４：あてはまる
- ５：とてもあてはまる

設問１
- 「４」と「５」・・・ 77.2%
- 平均値　3.87

設問２
- 「４」と「５」・・・ 91.2%
- 平均値　4.07

自身にとって活動がどうであったかに関しては、自己評価が比較的高い

学修支援活動に対する自己評価（量的分析２）



設問１・２	ALA自身にとっての効果
設問３～７	受講生との関わりと 受講生の学修促進

- ALA間で自己評価のばらつきが大きい
  - 最低値：2.86
  - 最高値：5.0
- 学域（授業開設部局）間での平均値にあまり差はない
  - 人間社会学域：3.57
  - 理工学域　　：3.84
  - 医薬保健学域：3.61

学修支援活動に対する自己評価（量的分析３）

◆設問１～９間の相関分析（Pearson）

- 設問１（面白い）×２（意義）　相関係数：0.534
- 設問１（面白い）×９（今後）　相関係数：0.534
- 設問３（受講生の立場）×４（受講生との関係）　相関係数：0.535
- 設問６（受講生の理解）×７（受講生の意欲）　相関係数：0.538

有意確率（両側）0%

- 設問１（面白い）と設問３～７には高い相関はみられない
- 設問２（意義）と設問３～７には高い相関はみられない

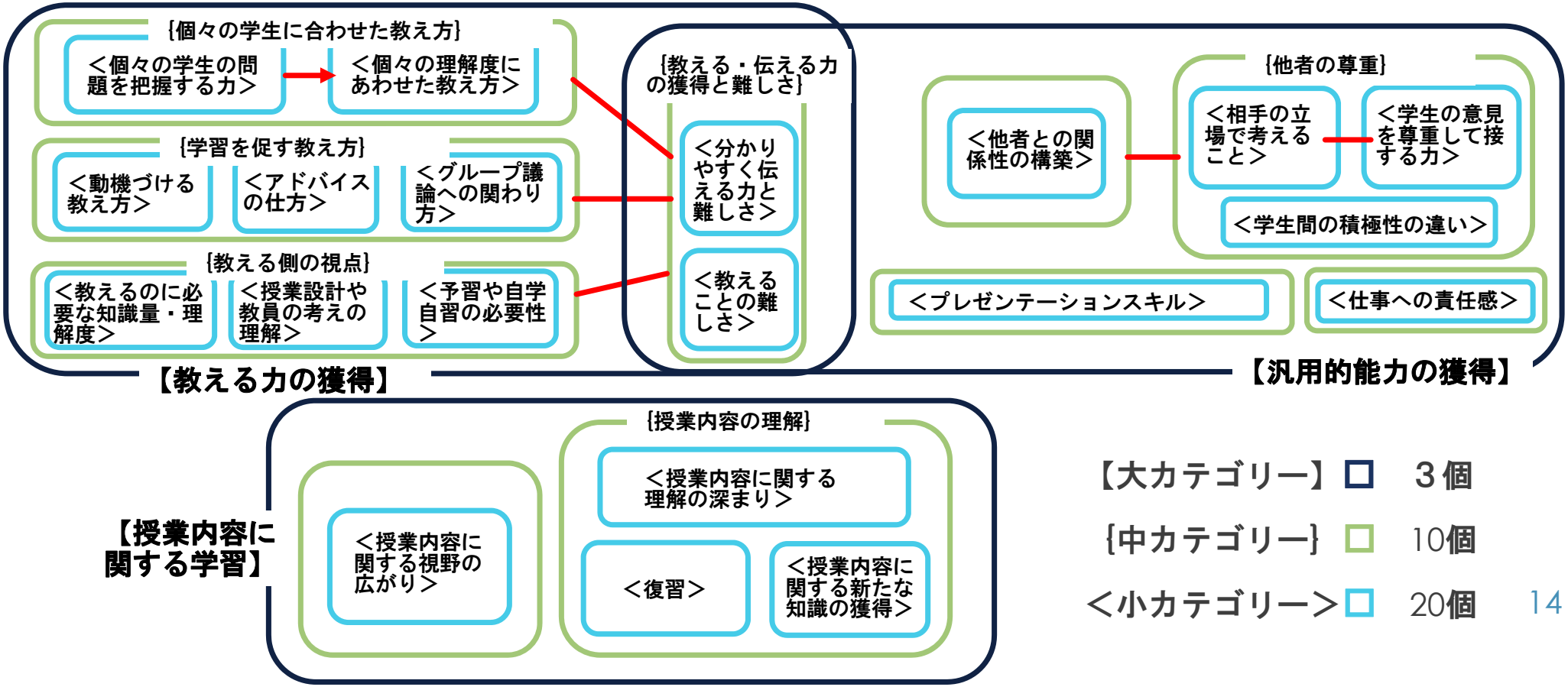
⇒　ALA活動の面白さや意義と、受講生との関わりや学修促進への自己評価には高い相関関係はみられなかった

ALAの学び（質的分析　方法）

◆ＫＪ法による自由記述内容分析

- 「吐き出された意見、情報それ自身が語りかける示唆に素直に耳を傾け」る
（川喜田 1967、p.78）
- 以下の問いに対する回答から学びに関わる記述を抽出
  「ALA活動はあなたにとってどのような効果がありましたか。また、どのようなことを学びましたか。」
  「ALA活動のなかで、困ったことや難しかったことはどのようなことですか。」
- 「一行見出し」作成（ひとりの回答に意味内容が複数ある場合は分離）
  → カード　計80枚
- グループ（カテゴリー）編成、図解化、カテゴリー間の関連づけ

ALAの学び（質的分析　図解）



【大カテゴリー】□　３個

{中カテゴリー}□　10個

＜小カテゴリー＞□　20個

ALAの学び（質的分析）【授業内容に関する学習】

{中カテゴリー}	＜小カテゴリー＞（カード枚数）	記述内容例
授業内容の理解	復習（8）	・質問会前に、実際に問題を解いて考え方を振り返ることで、自分自身の復習にもなった。 ・講義の内容を基礎的なところから見直すいい機会になりました。
	授業内容に関する新たな知識の獲得（3）	・自分自身も授業内容について調べ活動をしていく中で、新たな知識、史料にあたることができた。
	授業内容に関する理解の深まり（7）	・他者にアウトプットすることで自分の知識の再確認をすることで理解を深めることができた。 ・もう一度学ぶことでより深く授業内容を理解することができた。
授業内容に関する視野の広がり	授業内容に関する視野の広がり（6）	・ディスカッションに混じることで、受講生の意見から、私自身の見識を広めるものもあった。 ・受講生の質問から自分では思いつかない着眼点に感心させられることもあった。

ALAの学び（質的分析）【教える力の獲得】

{中カテゴリー}	＜小カテゴリー＞（カード枚数）	記述内容例
個々の学生に合わせた教え方	個々の学生の問題を把握する力（5）	・どんなことで困っているのか、今何を考えているのかといった人を見る・理解する力がついたと思います。
	個々の理解度に合わせた教え方（7）	・今回教えていたのは4つ下の受講生であったため、同じ学力ではなく、同学年に教えているように教えても最初は全く理解されませんでした。それから自分が相手の立場に立ってどのように教えるかを常に考え教えることで、受講生に理解してもらえるようになりました。これによって、相手の立場に立って考える能力が養われたと考えています。
学習を促す教え方	動機づける教え方（3）	・自分のアドバイスと先生のアドバイスを比べてみて、先生は上手く受講生の学習動機づけをされていると感じた。「こうした方が良いと思うよ」だけでなく「どういう風にしたい？」から始める指導法を学んだ。
	アドバイスの仕方（4）	・ただ単純に答えを言ってしまうのではなく、その課題で目指している到達目標まで導くために、どのようにアドバイスするかなど、いろいろと考えさせられました。
	グループ議論への関わり方（2）	・あくまで受講生ではなく、ALAの立場で話し合いに参加する難しさを学んだ。

ALAの学び（質的分析）【教える力の獲得】つづき

{中カテゴリー}	＜小カテゴリー＞（カード枚数）	記述内容例
教える側の視点	教えるのに必要な知識量・理解度（2）	・指導する側にも知識が必要であり、効果的に指導を工夫する必要があると思いました。
	授業設計や教員の考えの理解（4）	・教授やほかのALAとこの講義をよりよくするためにはどうしたらよいのかなども考えました。講義のありかたについて考える経験はなかなかないことなので、貴重な経験ができました。
	予習や自学自習の必要性（1）	・受講生の立場からは講義だけでなく予習を行うこと、自身の学習によって補っていくことの重要性を再認識した。
教える・伝える力の獲得と難しさ＊	教えることの難しさ（4）	・ALA活動を通して人に教えることの難しさを改めて学んだ。 ・他人に理解してもらうことの難しさを学んだ。
	分かりやすく伝える力と難しさ（9）	・どのように言えば、分かりやすく伝えることができるのか試行錯誤しながら教えることができた。 ・自分の中にある知識を言葉にして伝える難しさを感じた。

＊ {教える・伝える力の獲得と難しさ} は【教える力の獲得】と【汎用的能力の獲得】にまたがる

ALAの学び（質的分析）【汎用的能力の獲得】

{中カテゴリー}	＜小カテゴリー＞（カード枚数）	記述内容例
他者の尊重	相手の立場で考えること（2）	・相手の立場にたって考えることが難しかった。
	学生の意見を尊重して接する力（2）	・教育をサポートする立場として学生と接する際には、学生の意見を尊重することの大事さを学ぶことができた。よりよい意見を持てるように、学生と接するスキルが身についたと思う。
	学生間の積極性の違い（1）	・学生全員が授業や質問することに対して、積極的というわけではない。会話自体が苦手な学生もいる。
他者との関係性の構築	他者との関係性の構築（5）	・どのように生徒と仲良く関わるかを考えるきっかけになった。
プレゼンテーションスキル	プレゼンテーションスキル（4）	・プレゼン内容についてアドバイスすることで自分のプレゼンスキルについても客観的に見れたと思う。
仕事への責任感	仕事への責任感（1）	・講義内容を学習できただけではなく、与えられた仕事を責任をもってやり遂げることについてもよく学べました。
教える・伝える力の獲得と難しさ＊	教えることの難しさ	
	分かりやすく伝える力と難しさ	

＊ {教える・伝える力の獲得と難しさ} は【教える力の獲得】と【汎用的能力の獲得】にまたがるため省略

ALAの学び（授業担当教員の視点）

◆ALA採用科目担当教員に対するアンケート調査

- 実施時期　2016年3月
- 調査目的　ALAが授業に参画することによる教育上の効果と課題の把握
- 調査内容　ALAの学修支援内容、受講生とALAにとっての教育上の効果、担当教員にとっての効果、ALAの参画や制度の課題
- 回収率　44.4%（2015年度後期科目担当教員18名中8名）

◆ALAにとっての教育上の効果・・・ALAによる自己評価との比較

- 基礎知識の再確認と整理、理解していない部分の確認　【授業内容】
- 指導方法の習得、議論を支援するときのポイントの修得　【教える力】
- 教員の視点・考え方や授業の意味づけの理解、授業運営経験　【教える力】
- 学年を超えた交流の機会　【汎用的能力】
- 自らの学修を振り返る機会、学習の必要性と重要性の理解

ALAの学び　まとめ

① 学修支援活動の面白さと意義については多くのALAが肯定的に評価

② 学修支援活動を通して、
【授業内容に関する学習】【教える力の獲得】【汎用的能力の獲得】の３つに関わる学び（知識や能力の獲得、気づきや意識変容）が生じた（自己評価）

＋

教員からみると上記３つに加え、学習に関するメタ認知の獲得も

⇒ 学修支援活動は、ALA自身が深い学びを行い、多様で幅広い能力を獲得し、より主体的・自立的な学習者へと変わっていく機会になっている

考察

◆ ALAとして学修支援活動に携わる意義

① １）専門教育科目における活動

自分自身の専門分野に関する知識や理解を広げ、深める機会

２）授業（正課）における活動

自分自身の授業や学習に対する態度や姿勢の再認識、教員視点の獲得
＝ 大学での教育や学習に関するメタ認知

⇒ ALA**自身の今後の学修・学習意欲、学修成果に大きく影響する可能性**がある

② ピアとしての学修支援

・受講生との距離感、双方向の営み
・コーチングのスキルや心構えの獲得

考察（つづき）と今後の課題

◆学修支援活動の面白さ・意義と受講生との関わりの関係性

・面白さや意義と活動の自己評価には高い相関はみられなかった

・学んだ内容としては、 受講生の学習を促進するための方法や関わり方、関係づくりに関わるものが多く示された

→ 能力の獲得や気づきはあるが「受講生の効果」としては自信がない？

◆今後の課題

・活動頻度、活動形態等による学びや自己評価の違い（ばらつきの要因）の検討
・共通教育科目でのALA、公募制により採用されたALAとの比較検討
・学期全体を通したALAの学修支援活動に関する学習プロセスの検討
・学修を支援すること、教えることへの自信や意欲とその変化の把握
・ALA採用科目の受講生にとっての教育効果の解明

参考文献

岩﨑千晶（2014）「ラーニング・アシスタントの実践的思考に関する分析―初年次教育“スタディスキルゼミ”における学習支援を基に―」『関西大学高等教育研究』５、pp.29-38。

沖裕貴（2015）「『学生スタッフ』の育成の課題―新たな学生参画のカテゴリーを目指して―」『名古屋高等教育研究』15、pp.5-22。

川喜田二郎（1967）『発想法―創造性開発のために―』中央公論新社。

立山博邦（2013）「大学におけるスチューデント・アシスタント（SA）制度の考察―日米比較の視点から―」『社会システム研究』立命館大学、26、pp.137-150。

西村悠・古川康一・小林郁夫（2011）「学生アシスタント制度の導入による半学半教の実践報告―SECIモデルによる解釈―」『プロジェクトマネジメント学会2011年度春季研究発表大会予稿集』pp.397-402。

日本学生支援機構（2014）『学生支援の最新動向と今後の展望―大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成25年度）より―』。

文部省高等教育局（2000）「大学における学生生活の充実方策について（報告）―学生の立場に立った大学づくりを目指して―」。